【レポート⑥】

仙波瑠璃

秋風が心地よくそよぐ十月末の池袋キャンパスで、東京芸術劇場副館長の高萩宏氏と立教大学社会学部教育研究コーディネーターの後藤隆基氏による「池袋学」秋季講座の第二回が行われました。今回の「池袋は〝演劇都市〟になれるか」というテーマについて過去・現在・未来という三つの視点から議論されました。

まず後藤氏から、戦後の池袋の演劇史についての話がありました。これまで池袋は、折々で「文化不毛の地」あるいは「演劇不毛の地」と語られてきたそうです。今回の講座は、たくさんの資料を用いて「本当に池袋は文化不毛の地、演劇不毛の地だったのか」を問い直すものでした。

後藤氏が「池袋演劇史の出発点」と考える終戦直後の池袋では、舞台芸術学院と人世坐（現・新文芸坐）が数少ない文化施設と言われていましたが、これらの他にも従来ほとんど知られていない、二つの小劇場があったことが紹介されました。東口にあった劇場アバンギャルド（一九四六年開場）と西口にあった池袋文化劇場（一九四七年開場）です。いずれも短命に終わってしまいましたが、演劇に情熱を注ぐ若者たちが集まり、当時としてはきわめて前衛的な活動を行っていました。今はない劇場の存在から、その後の池袋演劇史のルーツをたどることができるという興味深い話でした。

続いて高萩氏は、東京芸術劇場が開館するまでの経緯について「東京都総合芸術文化施設の基本構想報告」をもとに紹介されました。池袋駅西口のすぐ近くにある東京芸術劇場が建っている場所は、豊島師範学校（現・東京学芸大学）の跡地で、一九六九年に国から東京都が取得した土地です。一九七二年に東京都の総合芸術文化施設建設懇談会が設置され、一九八〇年に新たな懇談会が再設置されました。懇談会委員の中でも劇団四季の代表だった浅利慶太氏が、特に情熱を注いでいたそうです。

しかし、議論が行われていた最中に劇団四季がミュージカル『ＣＡＴＳ』の上演権を獲得し、浅利氏は『ＣＡＴＳ』の公演に注力するようになります。東京芸術劇場の当初の構想では五つのホールが計画されていましたが、一九八二年発表の基本構想では、中ホールと二つの小ホールに変更されました。高萩氏によれば、もしも浅利氏が東京芸術劇場に深く関わり続け、当初のホール建設案が実現していた場合、池袋の演劇状況はまったく違った道を歩んだだろう、とのことでした。

ちょっとした歴史のずれなどによって状況が変化することは、知られざる小劇場の盛衰から戦後の池袋演劇史をたどる後藤氏の視点と重なるように思います。お二人の話はそれぞれに、未来の池袋の演劇あるいは文化を考える上で示唆に富んでおり、池袋が持つさまざまな可能性を浮かび上がらせるためのヒントでもあったといえるのではないでしょうか。

最後に、これからの池袋が「演劇都市」になりうるのか、池袋における演劇の状況や豊島区の文化政策、東京芸術劇場と立教大学の関わり方などについて、高萩氏と後藤氏による対談がありました。中でも印象に残ったのは、豊島区では文化政策に力を入れることで地域の文化施設や教育事業が豊かになり、住みやすい街になっていくという話です。芸術文化あるいは教育の充実が人生を豊かにするという観点は、文学部に所属する者にとって非常に興味深いものでした。

また、二〇二〇年に東京で開催されるオリンピック・パラリンピックについても話題は展開しました。池袋の特徴を生かした「レガシー」をどのようにつくっていくのか。またパラリンピックに向けて、障がいをもつ人々とそうでない人々が関わり合いながら、福祉と芸術が融合した作品制作を行うことの必要性や運営側の課題など、池袋だけではなく豊島区全体で文化事業を展開していくことについて意見が交わされました。

演劇は身体を軸にする総合芸術です。映画等の映像作品とは違い、生身の人間が観客と同じ時間にパフォーマンスをして、リアルタイムの人間関係――それも互いが認め合うという希少な瞬間を直接目撃できる特徴を持っています。そしてそれが、観客の価値観に大きな影響を与えます。東京芸術劇場が、チケットの高校生割引を実施しているのは、感受性が鋭い高校生の時期に価値観が揺さぶられるような感動体験を与えたいという劇場側の思いが土台にあります。

私は高校生の頃から演劇に親しんでおり、立教大学への進学を志望したのは、近くに東京芸術劇場という大きな劇場があることも理由の一つでした。しかし、実際に劇団に参加して演劇活動に携わる中で、演劇があまり世間では慣れ親しまれていないと感じることが多くあります。演劇をより身近に感じてもらうための活動として、立教大学と東京芸術劇場が連携の機会を増やし、学生や地域の人たちに演劇に親しみをもってもらうことが必要ではないかと思いました。

その中で、今後の立教大学と東京芸術劇場の連携事業として、学生を対象に公演当日の空席情報の案内や割引のシステムをつくりたいという高萩氏の提案は、非常に魅力的に感じました。もし実現すれば、学生が東京芸術劇場に足を運ぶ機会が増え、演劇や音楽といった芸術文化に触れる機会も増えるはずです。

現在、立教大学と東京芸術劇場が隣接する池袋には、演劇好きではなくとも、演劇を身近に感じることができるような可能性を持った環境があります。芸術活動に触れ、感受性を磨き、生活の質を向上させる感性を養う機会が増えてほしいと思います。私もそうした機会に何らかのかたちで携わってみたい。そう思わされる講座でした。

（せんば・るり　文学部文学科英米文学専修二年次）